Niigata University

が，プライマリ・ケアあるいは精神科におけるうつ病治療の適切性に関してこれまで十分な検討はなされていない．そこで今回我々は，2005年1月から12月までの1年間に他施設から紹介され新潟大学医歯学総合病院精神科を初診し，DSM-Ⅳ-TRにより大うつ病性障害と診断された患者74人を対象として，その臨床特徴を後方視的に調査した．

精神科および他科から紹介された者はそれぞれ38人，36人だった．性比は精神科が1：1.5，他科が1：1.8と有意差なく，平均年齢はそれぞれ46.2歳，55.4歳と精神科が約10歳有意に低かった．疑いを含めうつ病と診断されていた者の割合は精神科が92.1％，他科が85.7％と同程度に高かった．抗うつ薬を投与されていた者の割合は精神科が94.7％，他科が52.8％，その平均1日用量もそれぞれ113.0mg，61.5mgと精神科で有意に高かった．抗うつ薬を投与されていた者について，精神科の33.3％，他科の26.3％で抗うつ薬の多剤併用が行われ，新規薬（SSRIまたはSNRI）を処方されている者の割合はそれぞれ49.1％，63.0％と，いずれも両群間で有意な差を認めなかった．

1999年に初診した全てのうつ病患者を対象とした川崎医大精神科の調査によれば，一般医によりうつ病と診断されていたのは31.8％，抗うつ薬投与を投与されていたのは16.0％と，今回の結果よりも低いものであった．この理由として調査対象や方法の違いに加えて，うつ病についての認識が一般医に広まってきたことがあげられる．一方で，多剤併用の多さや投与用量の少なさなど，一般医のみならず精神科においても抗うつ薬の選択や用量が適切に行われているとはいえない可能性が示唆された．このため，うつ病の診断や治療に対してさらなる理解を求めていく必要がある．

5　県立小出病院における精神科時間外受診の現状

宮本　　忍・新藤　雅延・坂井美和子
金子　尚史
県立小出病院精神神経科

平成18年1月1日から同年12月31日までの新潟県立小出病院における，精神科患者の夜間・休日救急外来受診状況を調査した．上記条件の総受診数366例のうち，追跡可能であった206例の受診状況，診断名，処置内容などを分析した．206例中，男性68例，女性136例，不明2例であった．当院通院患者は184例で，他院精神科通院患者が10例，精神科初診が5例，受診病院不明例が7例であった．診断別では統合失調症圏（ICD-10分類でF2）が67例と最多で，以下パーソナリティ障害（同F6）60例，不安障害・適応障害・身体表現性障害（同F4）32例，精神遅滞（同F7）19例，気分障害（同F3）16例と続いた．19例は電話での助言・外来予約のみで，186例は救急外来を受診し，うち7例は救急車での受診であった．救急外来受診者は診察や処方，注射・点滴などの外来治療を行い，その後入院となったのは21例（任意入院4例，医療保護入院17例，うち4例は救急車搬送例）であった．入院を要した21例のうち10例が統合失調症圏で，気分障害，パーソナリティ障害が各々4例であった．疾患ごとの受診・対応状況や，問題となる頻回受診例についての分析・検討を行った．

6　県立新発田病院の診療状況

大塚　道人・小河原克人・田中　　弘
県立新発田病院精神神経科

平成18年11月1日，県立新発田病院（以下当院）が移転開業し，救命救急センターが開設されるなど病院機能も変化した．また，精神科診療領域においても，身体合併症治療のニーズの増加等が予測される．

移転前の当院精神科における診療の推移を提示しつつ，移転後のニーズの変化について考察を行いたい．また，新病院紹介やこれまでの診療上

NII-Electronic Library Service